九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

戦後サークル誌にみる文学の役割 : 北部九州のサークル誌① 日炭高松

茶園, 梨加
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/16399

出版情報：九大日文. 13, pp.77-104, 2009-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

戦後サークル誌にみる文学の役割

――北部九州のサークル誌①　日炭高松――

茶園梨加（CHAEN RIKA）

一　はじめに――九州のサークル誌を対象とする理由――

近年、九州サークル研究会「サークル村」復刻版（不二出版、二〇〇六年六月）、「現代思想十二月臨時増刊号戦後民衆精神史」（二〇〇七年十二月）、大阪朝鮮詩人集団機関誌「ヂンダレ・カリオン」復刻版（不二出版、二〇〇八年十一月）の発刊などに見られるように、戦後を中心としたサークル誌の資料価値が見直されている。そうした研究の流れの中で、「サークル村」に関わった各人が所属していたサークルへ目が向けられつつある。今改めて戦後のサークル運動、文化運動における文字資料（主にサークル誌）を研究対象とする意味は、まず既存の研究の枠組みを問い直すことにある。「民衆」の表現活動は、「日本文学史」、「日本文学研究」において対象とすらなりえないものであった。「民衆」は読者の席にのみ追いやられた。それはまるで、名の知られた作家以外は誰一人として表現活動を行わなかったかのようである。しかし、商業的にではなく、文化運動の一つの手段として行う文学（あえて文学という言葉を使おう）はどのようなものであり、どのような意味があったのだろうか。私たちはそれらの文学が発表されたサークル誌を改めて評価し、読解することで、一九五〇年代の文学がもった意義を広義に理解することが可能となるだろう。それは、同時に彼らの文学を「日本文学」として括らない既存の研究の枠組みを映し出すにちがいない。

本稿で論者が対象とし、明らかにしたいことは、一九五〇年以降の北部九州のサークル誌における文学の役割である。対象を五〇年以降に、そして北部九州のサークル誌を選んだ理由は、論者が九州サークル研究会の機関誌である「サークル村」の存在をまず念頭におきたいからである。「サークル村」は、上野英信、木村日出夫、神谷国善、田中巌、谷川雁、田中和雅、花田克己、森一作、森崎和江を編集委員会として始まったサークル誌である。発行所を福岡県遠賀郡中間町（現福岡県中間市）におき、九州・山口各県の無数のサークル[1]に所属していた人々がそこに集った。つまり、「各分野にわたるサークル活動家を結集した、それ自身が一個のサークルであるべきおおきな会員誌」[2]であった。その中でも特に当時、また後に全国的に知られることとなる谷川雁、森崎和江、上野英信、石牟礼道子などについては、現在も頻繁に取り上げられて議論されている。しかし、「サークル村」が、無数の無名な人々で成り立っていた雑誌（＝「村」）であるのならば、そこに集った人々の姿を捉えずして、その全体像を捉え得たとは言い難い。無名のサークル活動家の各々が所属したサークルの様相を捉える必要がある。

また、このことは「サークル村」という九州・山口における、単なるローカルな問題にかぎったことではない。一九五二年の

GHQによる占領の終焉にともない、「国民」の多くが自らの文化を創ろうとする国民運動、文化運動が全国的規模で行われたという同時代的状況があった[3]。その中で、大きな位置を占め全国に連帯の輪を広げたのが、炭鉱労働者による労働組合傘下のサークル運動であったとされている。特に、炭労主催の全国誌「月刊炭労」における文化運動の様相は、たとえば文芸コンクールを度々開くなどして、労働者の表現の場として広く知れ渡っていた。「月刊炭労」において、取り上げられるサークル名は、筑豊や杵島、長崎、また山口宇部、北海道の炭鉱サークルなどもあり、同時に「サークル村」に集った同人たちが所属するサークルでもあった[4]。だが、九州で刊行されていた「サークル村」が特異な点は、炭鉱労働者だけではなく、同時に他業種の労働者や、「南九州」の農民たちによるサークル運動をも射程にいれていた点である。五八年九月に産声を上げた「サークル村」という「奇妙な村」（「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」）は、創刊から二年後の六〇年五月の第三巻第五号をもって休刊となり、同年九月に再刊、六一年十月の第四巻六号で事実上終焉となった。つまり、足掛けわずか三年間の活動だったわけだが、当時雑誌「文学」誌上などでたびたび掲載されていたサークル論のなかで、「サークル村」の活動が議論の的となることもあった。

一九五〇年代後半には、サークル論が数多く発表されている。終戦直後、GHQによる占領により「与えられた」解放と民主主義という「大きな輪」と、同心円である「大衆の実情」の「小さな輪」の間には空間が存在した。この「小さな輪」から空間を埋めていこうとした試みが戦後サークル運動であったといわれる[5]。五九年六月、谷川雁は「サークル運動の現在地点」[6]と題し、サークルの現状を論じている。それは、「去る三月二十九日、国民文化会議が主催した文化活動者会議」において日高六郎が文化運動の現状についての報告を行ったことを基調として述べたものである。谷川の文章のあとに添付された日高の「〈資料〉文化活動地方代表者会議における問題提起（三月二十九日）」によれば、サークルの「独立王国主義」を打破するために、より「大胆な交流」「異質のものの交流によって交流するもの」が必要であるという。そのために計画されたのが「国民文化全国集会」と全国交流誌であった。谷川自身は、「創造主体と享受する部分との距離がどれだけ接近したかということで測るよりほかには、まだはっきりした運動の尺度を持たないと考える。にもかかわらず、この接近は単なる物理空間的な接近ではなく、創造主体が同時に享受対象でもあるような一つの人格の出現によって、飛躍的な変化の可能性を暗示している」という。「これまでのサークル運動は本来の思想・文化運動の予備段階でしかなかったと判断せざるをえない。今日ようやく状況のもっとも硬い部分に集中して自己の全身的変化をかちとろうとする意欲が大衆のなかにすこしずつ広がっている」と述べた。また、同年十月の「文学」では、「文化運動における創造と組織」というテーマのもと、サークル論が纏まって発表されている。そのなかで、「政治的志向と芸術的感覚が統一され、集団的志向と実存的発想とが統合される方向へむかって努力す

ればよいという、道徳教育的解決法は、サークルの活気を喪失させるものだ」、「「政治主義」的偏向を指摘されたならばサークルの政治的領域での自己表現が、「政治主義」の名に価しないほどに、陳腐なものでしかないことを恥じるべきだ」[7]といった言葉とともに、谷川雁のサークル論を「アジア型共同体の再生を夢みる独特なサークル論であり「個性没却」の思想をきわめて個性的に語る加害妄想（！）のごときもの」[8]、やはり「行動と思想のサケメが横たわっているというのが」、否定できない現状[9]と批判するものもあった。

このように「サークル村」の活動は、九州の一「地方」に拠点をおきながら、中央誌で賛否両論をおこしてきた。論者は、「サークル村」同人であったサークル活動家が所属していた各々のサークルの特徴を、主にサークル誌に目を通すことで捉えてみたいと考えている。その中でも特に文学作品を対象として扱う。「サークル村」は、「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」にあるように、「新しい創造単位」が、「創造の機軸に集団の刻印をつけたサークル」である。「創造と生活（労働）の律動が一緒でなければならないという観点をまともにムキにおしすゝめて、創造の結果だけでなくその全過程に集団の息吹きをこめようとするもがきがなければならぬ。それは常にとゞのつまり集団に帰着する運動としてとらえられねばならず、個人に帰着するものはサークルとみなすことができない」としていた。では、このような集団創作の形を掲げるまでに、どのようなサークル活動が存在していたのだろうか。また、「意識的に交流をつくりだす立場、つまり工作者の精神」は、「理論を実感化し、実感を理論化しなければなら」ず、「知識人に対しては大衆であり、大衆に対しては知識人であるという「偽善」を強いられ」、「はさまれる」、という。よって「この危機感、欠如感を土台にした活動家自身の交流が現実の急務」であった。そのため、サークル活動家たちの交流がどのように行われていったのか実際に「サークル村」以前のサークル誌を中心に見ていきたい。

このような問題点を掲げ、まず本稿では、「サークル村」創刊に至る基盤の一つになった日炭高松における文化運動、サークル運動の様相をみていくこととする。その際、「サークル村」に加入することのなかった地域の文化運動の諸相もみていきたい。当時の文化運動の多重性を把握した上で、労働者たち自身のサークル運動との差異をも捉えたいと考えているからである。

二　地域の文化運動の諸相

「労働藝術」「地下戦線」「炭砿長屋」「月刊たかまつ」（「文芸誌たかまつ」）といったサークル誌は、日炭高松（日本炭鉱高松坑）労組の下にあった文芸サークルによって刊行された文芸誌である。これらの雑誌は、あとで詳しく述べることになるが、サークル運動家であった上野英信が中心同人の一人だったこともあり、後の「サークル村」に繋がっていく集団の一つであった。上野と谷川雁が手を結び、九州サークル研究会の構想に至ったことはすでに知られているとおりである。しかし、日炭高松の

サークル運動が「サークル村」に至る大きな要因となったのは、上野の存在だけではないだろう。もちろん、上野が他の労働者たちを主導したことにより、サークルの発展と労働者の意識改革が広まったことは疑いもないことである。だが、それだけではなく水巻町の文化運動がその後の九州におけるサークル運動に影響を与えたことは等閑視できない。

日炭高松が所在していた水巻町は、「福岡県北部、遠賀郡の東端に位置」し、「北は同郡芦屋町と、東は北九州市、南は中間市、そして遠賀川を挟み、西は遠賀町との二市二町に隣接」[10]している。これら隣接する地域の特徴としては、北の芦屋町には戦後占領期に米軍芦屋基地があり、東の北九州市には八幡製鉄所、南の中間市には大正炭鉱が位置していた。大正炭鉱は、「サークル村」の谷川雁、上野英信、森崎和江が共同生活を営んだ地であり、そこが「サークル村」の発行所となった土地である。また日炭高松は、「明治三十九年（一九〇六）、頃末炭坑が三好徳松の所有となって三好炭坑と名を改めたころから、日露戦争によって石炭の需要が高まり、当町域内の人口も著しく増加しはじめた。これらの集落は炭坑の坑口近くに集中し、古賀、杁、頃末、立屋敷、吉田に炭鉱住宅、いわゆる「炭住」が形成されていった」[11]。つまり大規模な炭鉱であった。

では、このような特徴を持つ水巻町で、戦後どのような文化運動があったのだろうか。『増補水巻町誌』によると、一九五〇年代当時の「文化活動」は、一九五一年三月、水巻町制十周年に水巻町公民館から刊行された「蟻塚」と、日炭高松の活動として、機関誌「蹠趾」「文芸教場」がある。これについては、「文化面においては、絵画、合唱、謡曲、舞踊などの芸術・芸能や、俳句、短歌などの文芸の同好会があり、機関誌（蹠趾、文芸教場）も発刊されていた」という記述から、他にも多くの文化集団が存在していたことが分かる。「蟻塚」については、拙稿[12]にて触れたが、水巻町公民館にて発行された文芸誌であり、その内容は地域発展の意図が強いものであった。このことは、「蟻塚」第一集（一九五一年三月）に掲載された大貝五十三（水巻町長、水巻町公民館長）の「創刊を祝して」のなかで「近年著しく発展しつゝある我が水巻町」から「平和と自由と心理との旗を掲げ、文化水巻の先駆者として、水巻文学サークルが」機関誌「蟻塚」を創刊することを「心から祝して」いることからも窺える。終戦後文化国家建設が唱えられるが、その「文化」こそ、「一国の発展を、只その武力や富の力のみに頼ることの愚かしさ」から救う「唯一のものであり」、水巻町の功績と努力を「本誌に期待している」とも述べられている。また、「編集後記」には、機関誌の意図は、「この一冊から水巻町の発展が生れ、インテリゼンスが育ち音楽や絵画が論ぜられ」ることであり、「こうした意味で近く誕生する音楽サークルや絵画、映画サークルの人達」からも意見が積極的に出ることを期待する旨が記されている。

一方、「文芸教場」は、昭和四十年二月十五日に発行された第二号[13]のみを現在確認することができる。それは、四頁の小冊子となっており、発行所は文芸教場新社[14]、主幹は持永虹村

となっている。句誌としての特徴をもつこの冊子は、河野静雲、持永虹村の俳句を一面に掲載する。二、三面は、「各地句会」として、「杤（高松ホトトギス）句会河野静雲選」、「（小倉）企教野句会河野静雲選」、「北九州ホトトギス句会（於小倉）河野静雲選」の俳句が掲載されている。このことは、機関紙「日炭高松」において、戦後から掲載された「句会」欄と見事に一致する。そこでもやはり、ホトトギス派河野静雲の選による作品が毎回五から十句紹介されていた。例えば、竜茶煙という俳人は、たびたび機関紙「日炭高松」、「句会」欄にてその俳句が紹介されていた人物であるが、この「文芸教場」第二号においても、「杤（高松ホトトギス）句会河野静雲選」の中で、「生みたての紅ほのかなる寒卵」という一句が紹介されている。また、同時に「文芸教場」には、「杤句会」のような高松ホトトギス句会、つまり日炭高松を母体として行われた句会とともに、「（小倉）企教野句会」「北九州ホトトギス句会（於小倉）」のように、北九州市内で行われた句会で詠まれた句についても、同じ河野静雲選ということで掲載されていることが指摘できる。もちろん、ホトトギス派の広がりも考慮すべきだが、昭和四十年という時期から考えると、「日炭高松」紙面にて「句会」が掲載され始めた昭和二十年初頭という早い時期から度々行われてきた句会が、他の同派の句会と繋がる場の一つとして「文芸教場」があったものと思われる。また、冊子の特徴として、ホトトギス派俳人で、前日本炭礦鉱ＫＫ常務取締役の坂本見山、「日本炭礦育ての親、元同社常務取締役」の興梠友兼など、日炭高松のいわゆる会社側の重役の名が散見されることは、発行所が「杤」であることと無関係ではない。

当時、日炭高松の「炭鉱社宅」には、「鉱員社宅」[15]と「職員社宅」があり、「職員社宅」は、杤、宮ノ下、頃末大西、頃末、緑野、赤池の六ヵ所にあった。職員社宅があった杤地区には、さらに「職員（管理職）以上の社交の場」であり、「来客者の接待や労働組合幹部との団体交渉の場」でもある「杤クラブ」があった。「杤クラブ」は、「昭和十二年（１９３７）に、折尾から杤の高台に移築された三好本邸の横に建てられ」、「クラブを囲んで部長社宅があった」という[16]。つまり「杤」が、炭鉱の「職員」たちが集う場所としてあったのならば、後に説明を行う組合のサークル誌が炭鉱労働者自身による雑誌であった点で、雑誌刊行の意義が異なる。

また、先に挙げた機関紙「日炭高松」[17]とは、発行所が日本炭鉱株式会社遠賀鉱業所（水巻町頃末）の毎月二回発行されていたタブロイド版である。当時八千部が発行され、会社の情勢が主で、町の話題、スポーツや映画案内なども掲載された第二次世界大戦前から続く機関紙である[18]。日炭高松においてどのような文化集団が存在したのかを把握するため、記事のなかからいくつかの文学、文化関連のものを拾い上げてみたい。

まず、戦後すぐの昭和二十年代初頭の記事から見てみよう。昭和二十一年には、いくつかの文化団体、文学同好会、機関誌の名が散見される。第二〇一号（昭和二十一年六月二十七日）の、「文化團体紹介」の欄、「オンガサロン　アンサンブル生る」と題

された記事によると、「大庭寿雄氏を主催とする音楽同好の士集まり、オンガサロン、アンサンブルを結成、近く従業員並に家族慰安の夕を催す豫定で毎週火、木、土の午後五時半より杤ホールに於て、練習を始めてゐる、御期待を乞ふ／なほ同好の士は（男女を問はず）鉱業所庶務課佐竹氏宛申し込まれるよう希望してゐる。」とある。また、同じ紹介欄に「フエニツクス文學同好會」についても紹介がある。「同人相互の勉強のために既成のモラルに止まることなく文学の純粋を絶叫し続け月刊誌フエニツクスを發刊してゐる。／先に募集した懸賞短篇小説は編輯部で豫選をすゝめてゐる。作品原稿は直接福利課新聞編輯部杉江宛送られたし。」と記述されている。杉江とは、杉江勇のことであり、「後に福岡市の夕刊フクニチ新聞社に入社し、多彩な文筆で活躍」、「『福岡連隊史』などがある」人物であった[19]。さらにこれらの団体が結束する形で、同年八月に高松文化集団が結成される。「高松文化集團（假稱）の結成　輝かしい太陽が焼土を照らし、明るい希望を投げてゐる時、自由の芽は若い世紀の情熱によりぐんぐん育くまれつゝある。高松もその恵みにもれず若い知識人の手によつて幾つかの文化グループが成長しつゝあるが、いまのところ皆孤立し聯絡もない状態なのでこれ等のグループに呼びかけ同志的結合により大同團結して眞の民主文化を確立するため日炭高松文化集團が結成されることになり、その準備會が近く教習所で開かれる」（「回覧板」、「日炭高松」第二〇四号、八月二十五日掲載）と紹介されている。発起人として古岡康治や杉江勇の名が挙げられており、機関紙発行の計画があることも記載されていた。実際に、その翌月の九月一日第二〇五号では、「高松文化集團發足」と題し「芸術を愛し文化の普及に盡くす會員一同が情熱を傾けて眞摯な討議のうちに準備會を重ねてゐた高松文化集團も愈々機関誌〝足跡〟發行（九月二十日頃）を第一聲に健全な礦山文化の確立を目指して誕生することとなつた。／石炭の重要性と共に之が生産人の文化向上は亦大きく、新日本の文化建設に力強い足音であり、歴然たる足跡である。尚同集團は近くレコードコンサート、映画鑑賞の夕、カメラ、生花、書道會等多彩にして新鮮な行事を実シする。」とあり、実際に次号（第二〇六号、同年十月一日）では、九月二十八、二十九日に「杤」にて開催された「映画音楽鑑賞の夕」の模様が記述され、音楽は先に挙げた「オンガサロン、アンサンブル」と「青い鳥」という団体による合同演奏であったようである。高松文化集団が機関紙を発行しつつ、且つ他の文化団体と協力し行事を行う試みのあったことが分かる。また、同じく第二〇六号（昭和二十一年十月一日）には同年九月二十八日に発刊された「高松文化集團機関誌　蹤跡」の広告が掲載されている。「日炭高松」紙面をおっていくと、「蹤跡」はその後「たかまつ」に改題されていることが分かる。原稿募集も同紙にて行っており、投稿規定は、「評論三五〇〇字／創作、戯曲、童話三〇〇〇字／コント一〇〇〇字／随筆五〇〇字／詩、童話二〇行／短歌（五首）俳句（五句）」（第二〇七号、昭和二十一年十月十五日）であった。だが、昭和二十二年になると、高松文化集団に変化が訪れる。「鉱山文化の向上を目指して華々しくスタートした

高松文化集團は機関誌〝蹤跡〟を出版して以来さしたる活動もなく、また所内文化團體への連絡強化も成果を挙げ得ぬまゝに半年余を經過してきたが、本年四月から高松鑛が直方地区鑛山文化連盟の幹事鑛になつたのを期に再び文化活動の重要性が提唱され、文化集團も自己批判から立ち上がつて面目を一新、機関誌も〝高松〟と改題して〝蹤跡〟の同人雑誌的のものから綜合雑誌的なものとなり、集團自體も高松文化連盟へと發展した。／よって四月十二日所内各文化團體の委員集合して種々懇談し、越えて六月十日午後一時よりエブリクラブに於て吉田幹事長出席のもとに次の具体的要項を審議した。」（第二一九号、昭和二十二年六月二十日）その要項としては、「1．クラブ使用の件／エブリクラブの空席を連盟の綜合的な研究所として使用するため庶務課と交渉／2．連盟と福利課の関係／連盟と福利課を直結し行事豫算を各坑企劃委員で計画し厚生事業の文化面を今後は連盟で實施する／3．連盟と組合の関係／連盟會員即ち組合員であるから組合の文化部即ち連盟ということになり、文化を狭義に解釋してセクト主義におちいらぬよう意見一致／4．講師招へいの件／近く音楽、洋舞踊、合唱、短歌、演劇、詩、科学等の講師を招へいする／5．連盟経費の件／連盟の行事に要する豫算は充分支出して今後の文化向上に資する／6．文化會舘建築の件／全會員の情操をたかめ活溌な運動を展開するため古材を使用して室内体育、藝能發表會集合等に廣く使用出来る文化會舘の建築を考慮」の六点である。つまり、終戦後すぐの昭和二十二年に広義の文化運動の試みがあったことが分かる[20]。

また、昭和二十二年六月二十日発行の第二一九号には、俳誌「青蘆」の創刊が紹介されている。「九州各鑛山、工場俳句の中でホトトギス調として知られている高松句會は毎月河野靜雲氏を迎えてたゆまぬ精神をつづけているが、この活動をより活溌化するため初心者の入門もかねて左記投稿規定により俳句専問誌〝青蘆〟を七月創刊する／一、雑詠　河野靜雲選　五句／一、團扇　吉田むつを選五句」。投稿先は、鉱業社庶務課の龍茶煙であった。なお、昭和二十四年四月十五日の第二五〇号「文化新刊」欄によると高松炭鉱文化連盟が発行所となっている。その他、昭和二十年代初頭に限るが、「日炭高松」紙上では「文化　新刊紹介」というコーナーもあり、例えば、松本信也、高野智らによる綜合誌「凝視」や、塚邊光春、中山正實らの詩誌「れとると」、労組第四支部文化部発行の週刊壁新聞「黒ダイヤ」（第二三二号、昭和二十三年三月十日）、石本蒼天子などによる俳誌「ふるうめ」「ひばり」（第二四一号、昭和二十三年十月十日）、今村一年ら高松いざよい會による短歌誌「いざよい」、の活動があったことが窺える。このいざよい會については、「高松文學」でもその名を確認することができる。松本信也が編集兼発行人を務めた「高松文學」第二号（昭和二十四年十一月十五日）「あとがき」には、「いざよい短歌会の皆さんが、高松文学の会員になられましたので、本号から短歌の選は、今村、中川の両氏にお願いすることになりました。（松本）」とあり、近刊として『いざよい歌集第一集』の広告も掲載されている。歌集についての紹介記事には、会員は五十数名だと紹介されている。

また、いすず・みちひこ（上野英信）や千田梅二、黒井修らの温雅荘文化部による「労働藝術」は、第二四四号（昭和二十三年十二月十五日）の「文化―各寮めぐり―」においてその名が紹介されている。しかし、編集人の名前など詳細は明記されず、管見の限りでは、その後も上野、千田、また上田博らの文学運動が同紙面上にて紹介されることはなかったようである。

その他、講演会等も頻繁に開かれていた。例えば昭和二十八年六月十五日の第三二三号には、「童話の久留島さん来る」と題し、久留島武彦の講演の模様が紹介された。「福利課では四坑、浅川、高尾の各若松関係の公民舘および水巻町教育委員会との共同主催で、世界的な童話家久留島武彦先生をむかえ六月一日から五日まで所内各所で〝親と子〟のための講演会をおこなつた。／各会場とも満員の盛況であつたが氏の力説した論点は子供の立場から親と成人にたいする弁護で、大人は子供や青年をしらなすぎる、その結果社会に順應されない少年が続出している。／子供や青年の発育過程を知らなくて青少年の不良化防止など絶対にできないとむすんだ。／氏は一度演壇に立てば数千の聴衆の前でもマイクを使わず、場内をひきつけ独得の話術で聴衆を完全に魅りようした。」と綴っている。

一方、日炭高松の労働者たちが頻繁に目にしたであろう文字媒体は、機関紙「日炭高松」だけではなかった。水巻町役場から発行されていた「広報水巻」も少なからず人々に文化的情報を供給したはずである。この「広報水巻」は、戦後発行された新聞である[21]。住民の文化活動の様子を伝えたもののなかで、例えば昭和二十六年三月一日の二十九号では同年二月二十一日に開かれた演劇サークル座談会についての記事がある。それによると、日炭太陽座、頃末くわのみ会、古賀青年会の有志約二十名が参加し、「深い愛情によつてサークル結成の実を結んだ」。そうしたなか、「自立劇団の経費はどうおぎなわれているか。自立劇団を社会ではどう見ているか。女優の不足はどうすればよいか」等が話題に上ったという。これについては、後に見るサークル誌においても問題となった劇団の課題である。また、昭和二十六年四月五日三十一号では、「盛んになつたサークル活動」と題し、音楽サークルとしては水巻音楽サークルが、文学サークルは「蟻塚」が、そして謡曲サークルが紹介されている。共通しているのは、公民館と関係が深いということである。公民館でレコードコンサートが開催予定であったり、「蟻塚」の発行所は公民館であったりしたことは前述のとおりだが、謡曲サークルもまた公民館において練習を行っていた。

以上見てきたように機関紙「日炭高松」「広報水巻」、そして「蟻塚」は、炭鉱の会社側もしくは町役場側が積極的に発行していたものである。では、一方の炭鉱労働者が自らの手で発刊していた文字媒体には、どのようなものがあるのだろうか。また、その特徴とはいかなるものか。

三　職場機関紙の特徴

一節で述べたように、論者はサークル誌を中心的に取り上げる

が、サークル誌の一方で各々の労働の職場において機関紙が発行されていたことをまず指摘したい。論者が今回確認することのできた資料[22]のなかから、幾つかの機関紙名を列挙してみよう。

「しくり」（日炭高松労組第二支部仕繰機関紙）、「しくり」（日炭高松労働組合第一支部仕繰協機関紙）、「坑山（やま）」（日炭高松労働組合第一支部坑外協議会機関紙）、「萌友」（日炭高松労組第一支部青年部機関紙）、「仕繰新聞」（四支部）、「さいたん」（一砿採炭協議会機関紙）、「ぜんりょう」（日炭高松全寮機関紙）、「内間協」（日炭高松第一支部仕繰協内間協議会機関紙）、「せいさんきょう」（五支部生産協議会）、「せいねん」（第四支部青年部事務局）、「こうがい」（第二支部坑外協機関紙）、「せいねん新聞」（日炭高松労組第二支部青年部）、「つどい」（日炭高松主婦会）、「くっしん」（高松労組第一支部）、「さいたん」（第二支部採炭協議会機関紙）、「さいたん」（第四支部採炭協議会機関紙）、「どりる」（掘進協機関紙）、「支部だより」（高松労組第一支部機関紙）、「五朋」（五支部青婦会）、「採協新聞」（三支部採炭協議会機関紙）、「仕繰しんぶん」（第四支部仕繰協議会）、「仕繰新聞」（日炭高松第一支部仕繰協）、「日炭職組」（日本炭砿職員組合）

機関紙のタイトルを見るだけでも分かるように、炭鉱の労働現場で各々の組合機関紙が発行されていた。日炭高松は、一鉱から五鉱まであったが、そのそれぞれの現場における採炭、掘進、仕繰、坑外、など炭鉱独自の労働部署名を用い機関紙名としました。またその他、青年部、青年婦人会や、労働者たちが住んでいた寮の機関紙も存在していた。この機関紙の特徴としては、B４版二面のうち一面に組合の活動方針や行事内容、役員決定の記事などが掲載されている。二面は、主に詩、短歌、サークル紹介、職場交流にあてられている。もちろん、機関紙によっては一面に小説やエッセイの連載を行っているところもある。例えば、「地下戦線」や「炭砿長屋」、「月刊たかまつ」そして、「蟻塚」にも原稿をよせた山崎喜与志は、五支部生産協議会機関紙「せいさんきょう」二号（発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五八年十二月三日）において、一面に「親と子　廻転焼」という小説を連載した。また、山崎は七号（一九五九年六月三日）において、詩「反省」とエッセイ「視力」を発表している。その他、一砿採炭協議会機関紙「さいたん」では、八木善二がエッセイ「若き友への手紙」を連載（管見の限りでは、二十八号、一九五八年十月十三日から、三十六号、一九五九年七月十一日まで七回連載している）している。また、同じく連載ものでは、「よみもの　高松十年史より」という組合結成の小史が「さいたん」二十号（第二支部採炭協議会機関紙、一九五九年七月五日）[23]から掲載される。その後第二回は、二十一号（一九五八年七月三十日）、第三回は二十二号（一九五八年八月二十九日）、第四回は二十三号（一九五九年十月九日）と続いている。同じ頃「坑外新聞」二号（一九五九年七月二十六日）[24]でも、「よみもの　高松十年史より」という同じタイトルの記事が存在する。日炭高松労組が創立されたのは一九四五年であるが、十年経った一九五五年に機関紙「たかまつ」の編集企画として「組合十年のあゆみ」が連載されたという。このことから始まって、一九五九年五月の『日炭高松組合十年史』[25]の発刊に至っている。

この組合史は斗争の歴史を中心として編集したもので、専門的な立場からみれば、内容に不充分な点はあろう。だが、わが組合の斗いと、労働運動の歴史を集録したこの組合史が、いま組合の中核として、活動をつづけている職場の活動家に、生きた学習図書として充分役立つことを目標として、組合員各位の期待に応えるため、とぼしい智慧をしぼって編集にあたった。（有吉富造「あとがき」七七〇―七七一頁）

結成十周年と『日炭高松組合十年史』の発刊によって、前述の「さいたん」や「坑外新聞」においても、自分たちの組合の歴史を綴る磁場ができていたと言えるだろう。

このように、炭鉱労働者たちは、自分たちの会社や労働現場を書く（記録や描写の）対象としてまなざしていた。だが、同時に書く対象は外へも向けられている。それは、他の炭鉱との交流や平和運動への関わりとして表出されていた。紙面の関係上記事タイトルのみ挙げることとする。

▽他炭鉱との交流

●「萌友」七号（日炭高松労組第一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者香月一三、一九五八年七月二十五日）の一面、「手をとり合って仲良く進まう各地より便り来る！」

●「さいたん」二十七号（一砿採炭協議会機関紙、発行責任者串田花王丸、編集責任者今田重雄、一九五八年九月五日）の二面、「自由討論会三池労組出身灰原書記長をお迎えして」

●「事務協」一号（発行責任者二木宗興、黒河晃、一九五八年発行月日不明）の二面、「平和の祭典　九州の唄声」

●「せいねん」四号（第四支部青年部事務局、発行責任者高橋利晴、編集責任者白石繁夫、木村和昭、一九五八年十月六日）の一面、「九州の〝うたごえ〟開く」（水巻混声合唱団）

●「萌友」九号（第一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者香月一三、一九五八年十月二十日）の一面、「早良青年部訪問　好感もてる炭ほる仲間」

●「せいねん」五号（第四支部青年部事務局、発行責任者高橋和晴、編集責任者白石繁夫、木村和昭、一九五八年十一月四日）の二面、「九州のうたごえ開かる　「炭掘る仲間」会場にひゞく」

●「せいねん新聞」二十号（日炭高松労組第二支部青年部、発行責任者三浦隆男、編集責任者岸本明、一九五八年十一月十五日）の二面、「日本のうたごえ」、「サークル案内　水巻混声合唱団」「青年隊結成へ」

●「しくり」五号（日炭高松労働組合第二支部　仕繰協議会職場機関紙、発行責任者植木弘、編集責任者高木方男、一九五八年十二月一日）の二面「職場交流をさかんにしよう」

●「せいさんきょう」二号（五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五八年十二月三日）の二面、「平和の祭典日本の唄声へ」

●「萌友」十五号（日炭高松労組一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善男、編集責任者原野富士男、一九五九年三月十七日）の

二面、文鳥「短歌『製鉄の仲間』と交流して」

●「しくりしんぶん」十七号（一支部仕繰協、編集責任者真方、編集責任者柴田、一九五九年三月二十日）の二面、「協議会ニュース◇真方議長杵島炭砿へ」

●「さいたん」三十三号（一砿採炭協議会機関紙、発行責任者串田花王丸、編集責任者今田重雄、一九五九年三月二十日）の一面、「職場交流　杵島炭砿を訪ねて」

●「せいさん」四号（五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五九年五月三日）の二面、「仲間（杵島）の歌、詩、川柳、短歌紹介」、「杵島炭砿労働組合歌」

●「くっしん」十五号（高松労組第一支部、発行責任者松江安則、編集責任者坂本栄、一九五九年発行月日不明）の二面、「杵島労組へ職場交流に行く」

●「萌友」十八号（日炭高松労組第一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者原野富士男、一九五九年六月二十七日）の二面、香月一三「筑豊のうた声に参加して」

●「坑外新聞」三号（発行所不明、発行責任者森安照喜、編集責任者杉原・茂谷、一九五九年八月三十日）の二面、花田克己（興炭労支部）「鉢巻とリボン」

●「さいたん」二十三号（第二支部採炭協議会、発行責任者大石溢美、編集責任者馬場春一、一九五九年十月九日）の二面、「歓迎山田の組合員、家族の皆さん」

▽平和運動

●「せいさん」七号（第五支部生産協議会、発行責任者深崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五九年六月三日）の一面、「安保条約改定に反対し平和を守ろう」

●「どりる」八号（掘進協機関紙、発行責任者福田政弘、編集責任者夫富左沙男、一九五九年七月十六日）の一面、「安保改訂のねらい」

●「支部だより」一号（高松労組第一支部機関紙、発行・編集責任者第一支部執行部、一九五九年七月十八日）の一面、「広島へ!!堀さん中岡さんを送ろう」、「安保条約改訂版反対運動はじまる」、「国民平和大行進・県道通過！」

●「五朋」号数不明（五支部青婦会、発行責任者西岡渉、編集責任者坂本昇、一九五九年七月二十日）の一面、二木宗興「感動!!そして涙あり　平和大行進の水巻町通過に臨んで」、二面「平和友好祭　内容と企画について」

●「坑外新聞」二号（発行所不明、発行責任者森安照喜、編集責任者杉原、茂谷、一九五九年七月二十六日）の二面、「原爆許すまじ」

●「萌友」十九号（日炭高松労組一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者原野富士男、一九五九年七月二十七日）の二面、「ヒロシマへ、広島へ　国民平和大行進は進む」

●「さいたん」二十一号（第二支部採炭協議会機関紙、発行責任者大石溢美、編集責任者馬場春一、一九五九年七月二十日）の一面、「ヒロシマえ広島え！　国民平和大行進！　―水巻町を通過―」

●「しくり」十一号（第二支部仕繰協議会機関紙、発行責任者植木弘、編集責任者樋口安太郎、一九五九年七月三十一日）の二面、「原水爆禁止大会　早野君が参加」

●「せいねん」十号（第四支部青年部事務局、発行責任者高橋利晴、編集責任者白石繁夫、油布己千夫、一九五九年八月）の一面、「三度許すまじ原爆　被爆から十四年　平和ではあったが」

●「さいたん」八月号（第四支部採炭協議会機関紙、発行責任者川島弘、編集責任者吉武勉、一九五九年八月）の一面、「ひろしまの声を世界へ　原水爆禁止世界大会開かる」

このように、職場機関紙では限られた誌面に詩や短歌、小説の連載に加えて、自らの職場の歴史を綴る記事があった。また、他の炭鉱との交流や、うたごえ運動、平和運動など炭鉱の外に題材を求めている記事も存在していた。

四　「労働藝術」から「高松文学」を経て、「炭砿長屋」まで

前節では、労働者の手によって発行されていた機関紙の特徴を述べた。では、これに対しサークル誌はどのような意義をもっていたのだろうか。まず、日炭高松におけるサークル誌の一連の流れをおさえておきたい。「労働藝術」[26]、「地下戦線」[27]、「炭砿長屋」[28]、「月刊たかまつ」[29]という順序で上野英信が積極的にかかわったサークル誌の流れが存在している。もちろん「労働藝術」以前には、上野が関わったわけではないが先の二節で触れた「高松文學」[30]が位置していることになる[31]。さらに、時期としては「地下戦線」と「炭砿長屋」の間に位置する一九五五年七月一日発行の「高松文学」（創刊号のみ）が存在した。これは、先の松本信也による「高松文學」とは関係がなく[32]、発行所は日炭高松労組内の高松青年婦人連絡会議となっている。編輯責任者は鎌田勉、発行責任者は庄田明であり、日炭高松文学サークルという名前で発行された。見開きの頁には、山口県宇部市の東見初誌サークルによる『詩集まきやぐら』の広告[33]、上野英信、版画千田梅二による『ひとくわぼり』の広告[34]がある。「発刊のことば」（四頁）には、

高松にも終戦右（ママ）、文学サークルや同人雑誌が労働者の間に於いて刊行されて文学運動が行はれて来ましたが、ほとんどのものが永続きせず創刊から停刊し、又一年余りして創刊、停刊と云う形をとってきました。／これには色々理由があつて、ひどく苦しい労働でクタクタになつて坑内から昇るともう何もしたくなくなる。これは労働者がみんな体験していることである。その中でガリを切り製本をし、配布し集金すると云う事は、体力的にも精神的にも甚だ苦痛と忍苦を背負はされている事が、停刊の大きな理由となつていました。／私達は今日程、苦しい生活と戦争の危機に直面している時はありません。／私達は今迄の文学運動の「あやまち」をなおし、永続性のあるものにする爲には、小さなサークルや個人では行きづまりの来る事がわかりま

した。／そこで、全砿的な文学サークルをつくり組合の暖かい協力と援助のもとに立派な労働者らしい文学をつくることに、意見がきまりました。／この「高松文学」は労働者の生活を中心にして起つたことを、綴り方、作文、集団創作等、書いてきている人は勿論、今から書こうとする人や、書いた事のない人に、大いに書いてもらう様に努力して、みんなの「高松文学」にすることを目標としています。／労働者が一日々々成長していく如く「高松文学」も一日々々と労働者と共に成長する「高松文学」になる様に皆さんの協力を御願いします。

表紙には、千田梅二の版画「ボタ山風景」が刷られている。「創作」として、山下千代「感情」、江夏茂一郎「なやみ」、高田松平「炭砿もん」、遠藤百合雄「ある文学青年の日記」、南潔「俺の一日」、風間力「正男と三人男」、志羽田和間「暗影」といった短篇小説が並んでいる。また、短歌・俳句は石松弄涯らが作品を掲載している。詩作品にはきよし・あが、盛山国義、川島まさし等のものがある。この中で、山下千代、石松弄涯、きよし・あがは「炭砿長屋」でも、また、川島まさしは「労働藝術」と「炭砿長屋」でも作品を発表している。このことから、「高松文学」と「労働藝術」、「炭砿長屋」との一種の連続性を確認することができるだろう。

誌面には他サークルとの交流が確認できる記事がある。それは、「水巻映画サークルの御案内」と題するもので内容は以下のようになっている。

映画の好きな人同志が一つの集りをもつて、自分達の見たい映画を―よい映画、おもしろい映画を―安く、どんどん観ることができ、スターと話し合いができ、しかもそれらの映画の集りが、水巻文化をたかめてゆくことができればこんなに美しいでき事はありません。毎日の激しい仕事の疲れを鑑賞会批評座談会などで吹きとばす事ができればどんなに楽しいでしよう　入会される方は組合本部内映サ事務局へ（「高松文学」創刊号）

二節で述べたが、文化団体が交流する動きは高松文化團体の事例をもって確認済みであるように第二次世界大戦後数年から見られていた。だが、各々の文化サークルがどのように関わりを持ち、影響しあっていたのかについては不明瞭な状態が続いていた。本稿でとりあげるサークル誌は主に文学サークルが発行しているものであるが、なかでも「高松文学」は、労働者自身による文学サークルと他の文化サークルとの関わりが窺える早い資料として注目すべきである。「高松文学」以前の「労働藝術」では、詩、随筆、短歌、俳句、千田梅二の版画、黒井修のカットなどで成り立っており、千田の版画はあるが、例えば美術サークルとのつながりは明確に記述されていたわけではなかった。

「労働藝術」の同人でもあった川島まさしは、随筆「フィクションについて」の文章の後に「（文学作品を単に娯楽品とし

てのみ、思ひ込んでゐられる人々のために、又おこがましくもみちびきのために。これは映画や演劇についても同様です）」と付記している。

創作には大別して、既成の事実や体験を基礎として作られたものと、まるきり空想から発しているものとの二通りがありますが、最も多いのはこの二つを折衷したものではないでせうか。（略）まして創作の場合、事実に対して正確を期さなければならない特別の制約があるわけではなく、「話上手」の話と同じく、要は作者の意図がその作品にどのやうに生かされて、どれだけ讀者にアッピール（訴へ）するかゞ問題なのです。（略）ところで、既成事実から素材を得た作品を幾つも書いてゐるうちには、自然、身近な周囲に書くべき材料が種ぎれになつたり、作品内容が偏つてきたり、また素材に厭いたりするのは己むを得ないことです。こんなとき、職業作家とか、生活に余裕があつて、しかも面倒を厭はぬ足まめの人だとかなら、多額の費用なり時日なりを費つて、探索の旅行を試みるとか（たとへば最近論争を起した「ダム・サイト」だとか、またはその他のルポルタージュのやうに）または市井の巷を歩き廻つて「犬も歩けば棒にあたる」式にエサを嗅ぎまはることも可能なわけですが、「サークル誌」に関係する人たちの特殊性として、殆んどが日々の生活の糧としての生業をもつてをり、しかも肉体的な疲労と経済的な困難、時間的な貧困とで、とても以上のやうな眞似はできないことです。（略）技術的に上手な作品は商賣人に委せておけばよいので、吾々は下手でもよいから、アツピールと主張の強さの上で、恥しくない作品を書きたいものです。（略）／こゝで吾々が創作するときに強く銘記しておかねばならない最も大切なことは、（略）社会に無関心な市井の一主婦と云へども、実に密接に社会との連関性のなかに日常を生活しているといふことを、作者は重要視しなければならないといふことです。好むとも好まざるとも、社会に住んでゐる以上、どうしてもその影響から無縁であることは不可能なことなのです。（略）吾々が書かなければならないのは、心理を辿つて人間を描くことから、人間をとおして社会を描寫し分析することに迄高められなければならないと思ふのです。

（「高松文学」創刊号、傍点原文）

川島の言う、社会に訴えるための創作の在り方は、この文章のすぐ後に掲載された「新日本文学会北九州支部結成さる」の紹介文とも共通している。そこでは、北九州支部[35]の工藤憲男が「新日本文学会は、みずからの創作、批評、研究によつて平和を守り、民族の解放と民主々義のために積極的に活動する文学者の集まりである」と述べている。ここでの「文学者とは、文筆を職業とする者というような狭い意味のものでなく、文学ということが出来るような作品や評論を自分の手で創造する者」を意味している。「北九州支部はこのような文学者になろうと

する者、自分で考えたことや、どうしてもうつたえたいこと等を書こうと思つている者も共に集まつて」、自分たちの「文学を作り出していきたい」と展望を綴っている。

同じく「高松文学」創刊号の「編集後記」（「K」による文章）では、生活記録や綴り方、手紙、また落書きのようなものならば誰でも書けるのではないかと述べられている。だが、会話の中で相手を説得する際の言葉の表現力はあっても、いざ文章を書くとなるとすぐに言葉が出てこない。「そこに、文学運動やサークル活動の困難性があるのではないか」。またそれは、文章を書こうとする際「美しい文章や、空想ごとを書こうとする意識や、都合の悪いことは書いてはわるいと思うから」だという。だが、労働者たちでも書くことのできる綴り方や日記、メモのような、「私たち働く者の生活の中から」生まれ出る「日常の言葉」によって、「いま日本中の多くの文学者がとりくんでいる国民文学」を創り出している。「私たちの目の前には多くの文学遺産がある。新しいわれわれの芽はその遺産につながつている。私たちのサークルは書くことゝあわせて、もつともつと学習運動と共に進まなければならない。」、働く私たちには書斎はなく、「忙しい二十四時間の実践の中がわれらの書斎だ」と読者たちを書く運動へと導く。この、拙くとも自らの言葉で書き、同じ働く仲間たちに訴えかけるというのは、「高松文学」の前に発行された「地下戦線」から繋がる雑誌の目的であった（拙稿、注12に同じ）。

特に、「高松文学」が新日本文学系の作家がとりくんでいる国民文学と結び付きが深いのは、この雑誌が野間宏の座談会「文芸講演会」開催にともなって結成されたサークル誌だったからである。

野間宏さんが、二坑の労働クラブで、文芸講演会をやつたとき、無数のやまの文学者達がそこに集つた。／（略）／一人の青年は一段と声をはり上げて、／『みんなが今発言しているように、書きたくてうづうづしている。それを結集して正しく発展させる指導者が当地にいないんです。今までにそのような指導者が当地で、育てられてないことは、全国的な文学運動の指導者である野間さんたちの責任だと思います』／／これらの、代表された発言は、何を物語つていますか。多少でも文学活動をやつてきた者たちは恐らくこの大衆の燃えるような文学的要求を聞いて良心がうずき顔もあげられなかつたでしよう。／自然発生的な文学的盛り上がりといつた言葉ではもう生ぬるい現象で、高松の労働者の中に、ある力がわき上つております。／この熟しきつた果実をそのまゝ放置することはいたずらに頭のクロいカラス共をよろこばすことになります。ふれゝば、はじく情態になつておるのに指導者ウンウンで、みすごすことは、われわれはできない。／日炭高松青年婦人連絡会議は、この大衆の声を結集して、文学サークルの結成を提案した。組合の機関紙、青婦会議の活動等の中で全坑的な文学サークルの運動実践にとりかゝつたが、われわれの熱意だけで

は解決できない多くの問題がつぎつぎとでてきたのです。／青婦会議の中にも色々な文学グループを指導してきた人たちがいます。／同人雑誌的な傾向のもの、進歩的な文学の主張をもつている人、短歌俳句部門における伝統派を固守する人。／いわゆる文学に対する考え方（文学の政治性）の相違をどのように結集克服するかの問題。／運動をもつと広い大衆のすみずみまで浸透させるための組織とのむすびつき。それと文学サークルの自主性の問題。／雑誌を実際に出すに当つての活動家の発見、金銭の問題。／餘りにも大きな問題が山ずみされて、世話人一同はちよつと、しゆんじゆんした形になつた。どうだ、創刊号はもつとも金のかゝらない方法で、手ずりでやろうじやないか、一番世話人の多かつた一坑から、まず発刊のトツプをきろう。原稿募集の方法も確立できないでいるが、現在創作活動をやつている人たちの手持の原稿で、こんどはだそう。そのように話し合がきまり、それぞれ分担の活動がはじまりました。／集まつた原稿を前にして、われわれは、実は満足できなかつた。炭坑労働者の現実の姿を浮彫した感動的な作品があまりにも少ない。／素朴でたどたどしい表現の中にも、まだまだ文壇的な悪い部面の雑物がまじつている。プチブル的な臭いを発生しかねない作品集になるだろうが、わが日炭高松文学サークルの生長を物語る記念すべき号になるかも知れない。われわれ世話人一同は、みんなの、みんなの大きな力を信じておるのであります。（「編集室から」二十一頁）

野間宏が日炭高松で座談会を開いたのは一九五五年二月二十日である[36]。その後一九五五年三月と四月には文学サークル準備会が開かれた。同年四月八日付け[37]で高松文学サークル準備会、日炭高松青年婦人連絡会議から出された「御案内」には、「先般九州講演中、高松で開かれた作家「野間宏」を囲む座談会の席上で「働く人の文学は働く人の手によつてつくられる」ことが話され、高松の文学サークルを皆の作品で埋めて誰にでも読まれるサークルとしてつくろうと云う事になりました。」とあり、座談会において出された問題について話し合い、準備会が度々開かれていたことが分かる。このように野間の座談会を基にして、文学愛好者が集い「高松文学」の発刊につながっていった。

一方で、日炭高松または水巻町以外のサークルとのつながりもある。受贈雑誌として「まきやぐら」（東見初文学サークル）六～十一号、「詩集まきやぐら」（東見初文学サークル）、「詩集にぎりめし」（山梨中銀従組文化部）、「はまなす」（与謝の海療養所文学サークル）、「わかば」（日炭山田青年行動隊）、「まど」（発行所不明[38]）、「新日本文学北九州支部会報」一、二号の名が掲載されている。交流は九州の炭鉱のサークルに留まるものでなかった。

「高松文学」が創刊号のみで休刊となった後、登場したのが日炭高松文芸学習会が発刊した機関誌「炭砿長屋」である。「炭砿長屋」第一号（一九五六年一月一日）には、工藤憲男による「『高松文学』創刊号の読後感」という文章がある。このなかで工藤は「高松文学」に掲載された作品を一つずつ批評している。同

様に「新日本文学」同年十月号でも当間嗣光が「サークル誌めぐり」において「高松文学」を、「実生活から離れてしまった、古風な文章や「感情」みたいに余裕のなかに文学を見出そうという気配など気になるが七つの小説と多くの詩、短歌、俳句などでうまつており、働く人々がとにかくかいてやろうという気概に満ちてきたのに打たれた。」と評価し、二つの批評は同頁に収められた。このことについて編集部は「あとがき」で「新日本文学北九州支部長の工藤憲男さんから、「高松文学」一号の各作品についての批評と、文学サークルのありかたについての意見が送られてきました。高松文学編集世話人との共同研究を行うため、資料として無断掲載しましたことを筆者にこの場をかりておわびをします」と述べている。つまりこの時点では、「高松文学」が終刊したわけではなく、それとは別に「炭砿長屋」が発行されたていたことが分かる。先に述べたように、重複する同人も少なくないことから、発行所の違い以外には両雑誌の傾向に特別な相違はなかったと見て良いだろう。

「炭砿長屋」は、「高松文学」より他のサークルとの交流が盛んに行われていたようである。それは、まず受贈誌が多いことからもそう言えよう。「月刊炭労」（日本炭鉱労働組合）、「北斗」（中国文学会）、「炭鉱地帯」（三池労組文学サークル協議会）、「まきやぐら」（東見初文学サークル）、「山田文学」（山田文学サークル）、「鉱石船」（八幡市文学集団鉱石船）、「郷土と美術」（郷土と美術、京都）、「創雲」（芦屋町青教文化教養委員会）、「こだま」（三井山野合唱団）、「武生文学」（武生文学会、福井武生）、「にこよん文学」（にこよん文学、京都）、「心像」（心像同好会、水巻中央区）、「生活美術」（八幡生活美術）、「日本とソヴエト新聞」（日ソ親善協会）、「せいねん新聞」（永巻古賀青年部機関紙）といったサークル誌名、機関紙名が並んでいる。また、日炭高松版画サークルが結成され、千田梅二や上田博が表紙を担当していたことや、二号（一九五六年二月五日）では「うたごえ通信」と題しうたごえサークルに所属していた早野暉雄が、他のうたごえサークルのメンバーと往復書簡の形で意見交換を行っていることも他サークルとの交流が分かる点である。さらに、「炭砿長屋」二、三号では、「読者通信」の欄を設け、全国の読者から寄せられた感想を掲載している。例えば、二号の「読者通信」では、「まきやぐら」から花田克己が、「まきやぐら16号をお送りします。御批判や御感想がありましたら、是非送つて下さい。／高松文学の創刊を心から喜んでいます。先日僕たちのサークルの栗森君がもらつて帰つた「地下戦線」をよんで非常に感動しましただけに非常に期待して読みました。／「地下戦線」の鋭どさと違つてはいますが、今度の「高松文学」の豊かさは非常にうらやましいと思いました。今月13日に僕たちの組合で文芸大会を開いた時、上野さんにお無理を願つて来て話してもらいました。本当に労働者階級の立場に立つと云うことの大事さとむつかしさを痛感しています。／高松文学の一層の御発展をお祈りして。握手。／高松の仲間のみなさんへ」という手紙を寄せた。宇部興産の花田克己は、先にあった機関紙のように日炭高松労組と交流をもち、「サークル村」にも参加するようになる。この「読者通信」の手紙文面

から、「地下戦線」の時期つまり一九五〇年代前半から日炭高松と交流があったといえる。「読者通信」には他に、同じく第二号では東京全生園「広場」の田島康子、第三号には山口県南陽町「月刊明鏡」の山時隆信、東京都渋谷区の日本文学学校連絡事務局、北海道空知郡三笠町新幌内の秋好昌夫、嘉穂郡三井山野三坑の山本行進、北海道雄別炭山火山脈文学会の石田政治、東京都の高島穣からの通信が紹介されている。他サークルの読者から寄せられた手紙を掲載する手法は、「サークル村」の「消息」欄[39]として引き継がれているといえる。そこでは、鶴見俊輔や山代巴などといった名前もあり、さらに数多くのサークルから感想が寄せられた。また、「原子症による慢性脾腫」により山口県で静養中の上野英信を救い、再び日炭高松に帰ってきてもらうため闘うことを主旨とした「えがたい労働者作家上野英信を救へ！」（「炭砿長屋」第一号、一九五六年一月一日）という記事も掲載されている。この中で以下のような「上野さんからの便り」が紹介されている。

> 自分たちがうけた原爆の恐怖とギセイを再びくりかえしたくない。そして本当に戦争をふせぎ平和をまもるためには、労働者階級の力をつよめること以外にはないと考えて、私なりに一生懸命努力してきたつもりですし、これからも努力をするつもりでしたが、どうも体のほうが危くなつて空しくひきあげねばならなくなつてしまいました。残念でなりません。でも、もう一番元気になつて再び皆さんと一緒に斗いたいと思つています。（略）ともあれこうして手紙など書かねばならないということは不幸なことです。ヤマバトでチヤンポンをつつきながら菊千代マダムをひやかしながら、膝をつきあわせて語りあいたいものです。こんなことを書いていると目のまえに浮かんでくるようで、どうもいけません。／毎日〳〵夜もひるも、バカみたいに眠つてばかりいます。家族のものがあきれかえつています。とにかく眠つてさえいれば体の調子がいいようです。そのせいか、近ごろは食慾もおきてきました。他事乍ら御放念ください。一番いい季候で創作が書きたくて仕方がありません。でも、ちよつと無理をするとガタッときますから、当分自重します。あなたの云われるとおり、必死に療養します。

編集部からは、「上野英信の救援運動が各地で起つています。高松でもヤマの版画家千田梅二氏の「版画個展」を開きカンパ活動がおこなわれ、香月町でも若い人が中心にカンパがなされています。東京では中野重治などの作家が大きく救援活動を始めています」とあり、すでに上野の名が知れわたっていたこと、そして上野の病状をきっかけとした運動が、サークル誌を通して起こっていたことがわかる。

五　「月刊たかまつ」「文芸誌たかまつ」

「炭砿長屋」は一九五六年五月発刊の第五号で休刊となった。

その後、同年十一月に日炭高松文学・美術サークル協議会を発行所とした「月刊たかまつ」が創刊される。発行編集責任者は上田博、事務局は日炭高松労組教宣部内[40]、印刷所は、折尾印刷所であった。「月刊たかまつ」は、「サークル村」へ直接に繋がっていくサークル誌としても評価されている[42]。「月刊たかまつ」は、一九五六年十一月一日に創刊され、一九五八年三月八日の十一号が終号となった。九号からは「文芸誌たかまつ」と雑誌名が変わり、また十号からガリ版から活字に変更になっている。労働組合より資金面での支援をうけるようになったからであった。誌面では、江夏茂一郎、早野暉雄、高野智、山崎喜与志、上田博の名があり、「炭砿長屋」からの連続性が感じられる。発行編集責任者は日炭高松版画サークル会員の上田博であったが、実際に雑誌をとりまとめていたのは上野英信であった[43]。サークル誌の内容から読みとれる特徴を以下に挙げる。

まず特徴の一点目は、サークル協議会としての性格をもっていたことである。誌面から文学サークル、映画サークル、うたごえサークル、写真サークル（もぐら・サークル）、演劇サークル（つくし座）などが参加していることが分かる。

この機関誌と各サークル誌との関係についてよく質問をうけるが、あくまでも運動の主体は、自由な独立したサークル誌にある。多くのサークルが、それぞれのジャンルで、またそれぞれの性格や主義主張をもって、大いに競いあうことこそ望ましい。しかしその為には、書く運動をもっと広く組合員大衆のなかに燃えあがらせ、不断にその創造的なエネルギーを解放し吸収する努力を怠ってはなるまい。（二号「編集後記」三十二頁）

とにかく従前のような甘い考えでは、大衆のまえで歌唱指導なんかできないということだね。すすんだサークルでは、もう創作にも手をのばしておる。創作の行われている所なんか、さっきも云ったように文学サークルとの結びつきがしっかりしていることだ。即ち文学活動者が直接うたごえ活動の中に入ってきている。うたごえ活動者自身も、文学活動にたずさわっている、という事実だ。（四号、井手貞三「日本のうたごえに参加して」九頁）

「文学・美術サークル協議会」という名からも分かるが、様々な文化サークルが結束した協議会となっていた。そして、例えば文学の創作的性質をうたごえ運動にとりいれようとする井手の言葉にみられるように、すでに述べてきた「高松文学」や「炭砿長屋」でみられた他サークルとの繋がりよりも、同人たちの創作上において各々の文化運動の連結を具体的に意識し、理論化しようとするにいたっている。

創刊号では、早野暉雄が「つくし座とともに」（十五―十七頁）のなかで演劇サークルについて述べている。早野は、第七号掲載の「サークル運動の課題（演劇サークルの巻）これからの〝つくし座〟」（十七―二十一頁）と題する文章で演劇サークルが直面

している問題について綴っている。

まず第一の問題は〝つくし座の性格〟と私たちは云つておりますがどんな形で今後活動してゆくかということです。／最初、つくし座は高松青婦人会議の演劇部として組合員とその家族で構成していたのですが、その後、組合とは全然関係のない一般の人たちも入るようになりました。／何故かというと、組合員の中から女優さんとして入つてくる人が少い、というより全然入つてこないので、いきおい家族の中からか、それでもなければ一般町民の中からでも入つていたゞかないとお芝居ができないからです。／（略）／ところが一般の人たちは組合事務所に出入りするということがわかると勤務先からどんな圧力がかゝるかわからないそういう心配があるために、新聞などにのせる場合は水巻町の自立劇団ということにしてもらつてきた。又、事務所は水巻演劇協会として教育委員会においている。私たちとしては形はどんなでもかまわないから面白く楽しんでもらえる演劇活動をやつてゆきたいと思つているのです。ですから組合の職場劇団でも水巻町の町民劇団でもいゝわけです。／（略）／しかし困つたことに演劇にはいろいろと沢山の金がかゝるので組合から援助してもらわなくてはならないし、町の方からも出来るだけ財政的な援助をしてもらつた方がよいので、あまりその性格をはつきりさせてしまつたのでは困ることになります。／（略）あいまいな形ではなくもつとスツキリとしたものにしようということになりました。それは今のつくし座は組合員と家族を中心に職場劇団としてそのまゝ残し、別に水巻町民の劇団をつくろうということなのです。

組合員と一般町民が一緒になって文化団体を創った場合、組合から支援を受けているということが問題となる場合があった。つまり、所属する集団の名義が問題となる例である。このような問題は以前の「炭砿長屋」でも同様のことがあった。俳句創作を行っていた新日本文学会会員でもある石松弄涯は、第一号（一九五六年一月一日）の「公民館俳句に就て」の中で、水巻町では高松炭鉱を含めて「サークル活動の分野よりも公民館活動により多く取りあげられて来た」という。これは、二節で挙げたように、機関紙「日炭高松」紙面でホトトギス派の句会欄が頻繁にもうけられていたことからも分かる。石松は、「しかし、プロレタリア文学を提唱されてゐるサークル活動の指導者の人々は、公民館俳句会は民主的、進歩的な俳句のたちあがりを抑圧しようとする反動勢力を持つてゐて、それらの選者の多くは花鳥諷詠派の結社宗匠でありその指導も保守的な伝統に縛り付けたものであると批判をなしてゐる」、とサークルにおける俳句運動と公民館で行われる句会が相容れないという事実があることを指摘する。石松の考えは、このような批判を否定し、実際に「句作する人々が皆、一人一人労働者である事を無意識の中にも自覚してゐるし、また公民館の運営も労働者自ら

の掌によつてなされてゐるからなのであらう。すくなくとも反民主的な、反進歩的な気持で句作し、選句していゐる人はゐない」、優れた「俳句は階級意識の過剰から現はれるものではなく、やはり無意識な日常生活の労働者の戦慄の中からはき出る詩情である」、「俳句は、サークルの誌上に於ても俳句であり、決して、標語やプラカードの様であつてはなるまい」というものである。その一方で、第三号の「季語としての春季斗争」では、「高浜虚子編の「歳時記」にボーナスとして年末の季題」があるが、「私達が戦ひ取らねばならぬ苦しむ様は表現されてゐない」という。例えば「春季斗争」のように炭鉱労働者の日常から発せられる用語が、「伝統的な季節感を重ずる中に、純粋な季語として受入れられるだろうか」と疑問点を挙げている。ここで論者が問題としたいのは、「春季斗争」が「純粋な季語」として受け入れられるかどうか、ではなく、炭鉱労働者が自らの労働の実情を詠む場合に、季語という制約が作句を困難にしている現状があるということである。その創作上の困難が、公民館俳句とサークル運動における俳句との大きな隔たりとなっているのだろう。このように、演劇の所属団体の問題の一方で、作品の性質の問題により、サークル運動と他の文化団体の間に壁が生じることもあった。

雑誌の内容については、これまでの日炭高松の文学サークル誌よりもさらに充実したものとなっている。版画、詩、短歌、俳句、小説、随筆、エッセイ、聞き書き、マンガ、うたごえ運動の報告、映画批評、写真と今まで以上に多岐に渡っていた。さらに、組合幹部による投稿があることも大きな特徴だと言える。

第六号では、主婦会の二木寿子による「生活つづり方　風呂で」（二―三頁）、詩「痕（あと）」（四頁）が掲載されている。同号の「編集後記」では、「忙しい中を、主婦会の二木さんが原稿をよせて下さった。いわゆる「組合のお偉方」といわれる人たちというものは、人には書け書けと要求するが当人はペンをとらないものと相場がきまっていたが組合の教宣部長や主婦会の文化部長が率先して原稿をよせてもらえるようになって、こんなにうれしいことはない」とある。サークル誌は労働組合からの資金面での支援があるが、労組幹部についての批判記事が掲載されることがある。その一方で、「月刊たかまつ」で組合幹部による記事も載せていることは、サークル誌が意見が相違する者同士が互いの綴った文章を介して交流する場ともなっている一例である。

また、「炭砿長屋」と同じように他地域の文化サークルとの広範囲のつながりも指摘できる。誌面上に掲載された「受贈雑誌」一覧から引用してみよう。

●九号→「詩のつどい」七号、「火山脈」四一号、「萌芽」三、四号、「三池文学」一五号

●十号→「芽生え」八号、「山野文学」五号、「ぼたはら」六号、「裸像」十四号、「まきやぐら」二十九号、「断層」十号、「労働文化」八、十一号、「月刊炭労」八十九号、沖田活美詩集『斜坑』、「福岡作詞作曲の会」、「舞台の青春」（北京）

また、受贈一覧とは別に、記事として他サークル誌、もしくは他炭鉱名が出てくることもあり、これまでの交流が更に熟され各々のサークルもしくは労組の状況を見知ることができるようになっている。

三井田川労組「たがは」、大正炭坑「青空コーラス」、日鉄二瀬「山のコーラス」、杵島炭坑のうたごえサークル、日炭山田、高島、崎戸、常磐、道炭労、雄別炭坑、岩田屋デパート労組・臨時職員労組、上山田の木城炭坑の青年たち、京の上炭坑（上野英信「１０１日めの太陽」）

これらは、「日本のうたごえ」に参加し他サークルと交流した体験を綴った井手貞三の文章（第四号）や、大正鉱業労働組合歌「夜あけの歌」の紹介（第二号）、岩田屋労組らくがき帖、花田克己の「炭山の娘」の紹介（第七号）などによる。ここで名前が出ている「山野文学」と杵島炭坑のうたごえサークル、日炭山田、岩田屋デパート労組・臨時職員労組については、稿を改めて具体的に内容を検討することとする。

六　「ガリ版文化」と炭鉱労働者

これまで、北部九州の炭鉱マチ水巻における炭鉱労働者の文学作品の発表の場について、各々の機関紙、サークル誌の特徴を見ながら論じてきた。ここで、改めて論を簡単にまとめておきたい。

日炭高松には、主に①会社側が発刊した機関紙「日炭高松」、町役場の「広報水巻」、②公民館で行われていた句会や「文芸教場」、「蟻塚」、③労働組合のもとで作られた機関紙や、「労働藝術」から「月刊たかまつ」（「文芸誌たかまつ」）にいたるサークル誌が存在した。①では主に炭鉱における文化団体の記事を掲載し、ホトトギス派の俳句が紹介された。それは、②の公民館で行われていた句会とほぼ同じメンバーであった。また、労働者のサークル運動における俳句とは、創作の面で一種の「隔たり」があった。「蟻塚」では、水巻町の文化発展を目標とし技術面での向上を目的とした文芸雑誌作りがおこなわれていた。その一方で、③においては労働者自身がガリを切って雑誌をつくり、他の文化サークルや、他地域のサークルとの交流を行っていた。そして、その交流が手紙の紹介、サークル誌の紹介、うたごえ運動での交流、他の炭鉱についてを題材としルポルタージュを書く、そして、問題を共有する、というように、徐々に交流の密度が深まっていったことが誌面から判明した。日炭高松の問題から、他の地域の問題へと繋がっていたことが分かる。

その中で特に③の資料は、そのほとんどがガリ版刷り（謄写版、謄写印刷）のものであった。つまり、機関紙やサークル誌は、一方でガリ版という印刷方法に支えられていたことも忘れてはならない。ガリ版自体の歴史は古くここでは割愛するが、本稿で対象とした戦後、特にＧＨＱ占領期後から一九五〇年代後半

は職場新聞が全国的に広まった時期であった。金子徳好は、『ガリ版文化史―手づくりメディアの物語』[44]のなかで、当時の職場新聞は二つに大別できると述べている。「一つは、名前は職場新聞でも、実質的には共産党の細胞新聞であり、そのガリ版刷りの内容は、右傾化した組合幹部への批判が中心」であった。「もう一つはサークル新聞であり、映画や文学の同好者の集いの新聞だった。しかしこのサークル新聞も、活動家たちの一種の抵抗としての文化運動の一面があった」。朝鮮戦争が始まる一九五〇年、日炭高松でも労働者たちは敏感に現状を感じとっていた。それは、二節で述べたように、芦屋基地や八幡製鉄所が近くにあったためであるが、そのため「地下戦線」などでもそのことを題材とした作品が掲載されていた[45]。全国的にも「ガリ版の反戦ビラを配布して逮捕される青年が」多く、「ガリ版こそが反戦・平和の運動の唯一つの武器だったような時代」だったという[46]。五八、九年においても、反核、平和行進の記事が掲載された労組の機関紙が多かったことを三節で触れた。つまり、朝鮮戦争から「六〇年安保」に至るまでは、一方で労働者とガリ版との蜜月であったといえる。金子は、一九五六年に日本機関紙協会の事務局に入り、六四年に事務局長となる。日本機関紙協会は、一九四七年に創立した「労組を中心とする民主諸団体の宣伝センター」[47]である。労組の機関紙の編集指導をおこなう「編集講座」を開催していた。九州にも支部があり、森一作が一九四九年に日本機関紙協会九州連絡所をつくったことから始まる。森自身もさまざまな労組教宣部へ機関紙の編集指導にまわった経験を持つ。特に九州支部が当時、折尾印刷所内に事務所を借りていたこともあり、折尾が水巻町と隣接していることから、森は日炭高松の労組と交流を頻繁にもち、上野英信、千田梅二、宮下明、早野暉雄、国上伸雄などを直接知るようになったという[48]。彼は後に、「サークル村」結成時に編集同人として名前を連ねている[49]。日炭高松は労組が強く、機関紙製作も慣れていたので、他の炭鉱の労組が学んでいたところがあった。労組から資金面で援助があり、サークル誌を作る環境が他の炭鉱のサークルよりも整っていたと言える。また、日本機関紙協会のように、労働者の機関紙向上のため講座が開かれたこと、そして機関紙協会と労働者との出会いが、ガリ版文化を支えていたことは忘れてはならない一要素であった。

　各々の職場の機関紙とサークル誌の大きな違いは、まず形態が異なる点である。ページ数が異なるため、より多くの人に記事を載せる機会があり、長編小説も掲載することができる。そして分量の多い分、読ませる文章、より文学的な創作意識が求められる。また創作や編集に時間がかかってしまう。よって、労組教宣部のなかでも、さらに有志が集い作られるのがサークル誌であるといえるだろう。ただ、機関紙を作る際のガリ版、編集の技術はサークル誌にも活用されていたといえる。また、今までみてきたように、職場機関紙において交流をおこなった杵島炭鉱など他の炭鉱は、サークル誌においても交流があった。そういう意味において、両者の共通点は多く、サークル誌を考えるとき機関紙もまた避けては通れないだろう。

では、このように戦後の一定期間、労働者たちが自らの手で作品を創り、ガリを切り、作った機関紙やサークル誌を他の労組やサークルと交換していたという現象を、私たちはどのように総括すべきなのか。「文芸誌たかまつ」第九号に掲載されたあが・きよしの詩には、炭鉱労働者がサークル誌を創る過程が如実に表現されている。

こいつら一字一字が生きているように／感情をこめ／誰にでもうつたえる事ができるように／身の廻りの出来事や／いま起きている斗いを書きつけていく／／坑夫はゴツッとこぶしをうち／子供たちはワァーツとかんせんをあげ／おばさんたちは、大声でしやべりはじめる／そんな字を一字ずつ書きつけていく／寒い室は暖かくなり／破れた窓はひとりでにふさがり／飢えた子供には／パンがツバメのように飛んでいく／／石炭のような文字がなすりつけられ／つぎからつぎえと廻され／ひとりひとりうなずき／スイツチはひとりでに切れ／ベルトコンベアはとまり／踏みにじられた雑草が／むくむくとおきあがる／／職場のすみから長屋え／となりえ　またとなりえ／一瞬にして知らされる／／そいつは活字でない／ガリ刷りでもない／恋人たちのように抱きあつて／語られる／ひとの体温でぬくめられた文字／悲しいしらせ／こみあげる怒り／ひとりで泣いたこと／みんなで笑つたこと／／ゆがんでいたり／カタカナであつたりまつくろいやつが／いつぱい書きつけてある／ひえないうちに／読んでくださいと書いてある／それがわたしの仕事でありたい（あが・きよし「パンがツバメのように」）

この詩からは、炭鉱労働者によって作られる機関紙、もしくはサークル誌が、同じ炭鉱労働者たちや子どもたち、また女性たちの関心を惹きつけてやまないものとなるよう、作り手の願いが綴られている。三連目では、印刷の過程が、炭鉱労働の過程と二重写しになっている。「石炭のような文字」が「一字一字が生きているように」擬人化されているが、あたかも労働者たちが「ひとりひとりうなずき」労働に従事する姿として読むことができる。そして四連目では、刷られた文字列が、自由に動き出し文字以上のものへと変形し人々へ届けられる様が描かれる。「ひえないうちに読んで」ほしいその文字列は、二連目にあるように、飢えた子の空腹を満たすような文字列なのである。だが、それはあたかもパンがつばめのように飛んでいくように、一方では絵空事でもある。それゆえに、最後の「それがわたしの仕事でありたい」という言葉は想像以上の重みを読者に与えている。記事をつくり文字を刷る作業に、炭鉱労働を見ている作者は、サークル誌や機関紙の可能性とともに、炭鉱労働が身近な人のためとなって欲しいという想いも綴る。そこには、常に自分以外の誰かへ向けられる想いが伴われている。

サークル誌ではたびたび「手紙」が紹介されていた。しかし、そもそもサークル誌自体が「手紙」としての役割を果たしていたといえる。そこにはつねに読者が居て、応答があるのである。

見てきたようにサークル誌には、サークルで行われた行事や職場闘争のルポとともに、詩、俳句、小説など創作が行われていた。事実のみを伝えるルポなどの記事だけでもよかったかもしれない。しかし、実際に文学がそこにはあったのである。書き手は、読者を想定して創作を行うが、サークル誌や機関紙の場合、その読者は同じ職場の労働者たちであり、また他の地域の労働者、ときに職種の異なる労働者たちが主であった。サークル誌の交換によるサークル間交流のなかでは、名も無き書き手ではなく、リアルに名前を持った「作家」たちがいたのである。そして、他の書き手の作品が賞に選ばれれば、自分ももっと興味深い作品を書こうとする意識があったはずである。そこには、文学を分かち合う仲間が居て、リアリズム作品が往還する場があったのである。それは、自らの手で創作をし、誰かを楽しませ、感動させ、時に共感を持たせ、奮起させたいという、欲望である。これは決して自己満足というものではなく、確実に顔の見える相手に届けたいという強い想いであったはずだ。各々の作品は暗いものであったり切迫した実情を描いたものもあるが、雑誌全体の印象からは、集団が閉じられたものではなかったことが分かる。それは手紙があり、通信があり、他サークルとの交流があり、開かれた空間があったからである。人と人との往還が、文化運動にとって大きなエネルギー源となっているといえるだろう。サークル誌や機関紙、さらには五〇年代のガリ版文化は、炭鉱労働者たちに文学を語る場、文学作品が往還する場を創り出し、そこには切実な闘争に対し連帯する手段としての文学が存在していた。

【注記】

1　「九州・山口サークル地図（その一）」（「サークル村」第一巻第四号、一九五八年十二月二十日）、「（その二）鹿児島県加世田市の部」（第二巻第一号、一九五九年一月二十日）、「（その三）熊本県の部」（第二巻第二号、一九五九年二月二十日）、「（その四）大分県の部」（第二巻第三号、一九五九年三月二十日）、「（その五）佐賀・長崎の部」（第二巻第四号、一九五九年四月二十日）によると、全部で二〇四のサークルから「組織加入でなく個人加入の原則」（「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」、「サークル村」第一巻第一号、一九五八年九月二十日）に則り参加者が集っている。これほど大多数のサークルが当時九州、山口各県には存在していたことが分かる。

2　「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」、「サークル村」第一巻第一号、一九五八年九月二十日

3　北河賢三『戦後の出発　文化運動・青年団・戦争未亡人』（青木書店、二〇〇〇年十一月二十日）、大串潤児「Ⅳ　戦後の大衆文化」（吉田裕編『日本の時代史26』吉川弘文館、二〇〇四年七月）、三輪泰史「一九五〇年のサークル運動と労働者意識―東亜紡織泊工場「生活を記録する会」にそくして」（広川禎秀・山田敬男編『戦後社会運動史論―一九五〇年代を中心に―』大月書店、二〇〇六年一月）を参照。

4　水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開―文学サークルを中心に（前）」（「国語国文研究」第一三三号、二〇〇七年十月）、「同（後）」（「同」第一三四号、二〇〇八年三月）、「炭鉱労働者と文化（上）―一九五〇年

代における文学サークル運動を軸に」（「層　映像と表現」vol.2、ゆまに書房、二〇〇八年八月）に詳しい。また、水溜には、「一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」（「北海道大学文学研究科紀要」第一二六号、二〇〇八年十一月）もあり示唆に富む。

5 高田佳利「サークル運動の停滞を破る」（「思想の科学」一九五九年七月）「文学」に掲載。

6 日高六郎「サークル的姿勢について」

7 いいだ・もも「原点はどこに存在するか―田舎政論家の詩論風の手紙―」

8 真鍋呉夫「炭鉱労働者の文化運動―行動と思想のサケメ―」

9 水巻町郷土誌編集委員会編『増補水巻町誌』二〇〇一年六月、一頁

10 『増補水巻町誌』十八頁

11 「炭鉱夫が炭鉱夫の生活を書くということ」（「九大日文」九号、二〇〇七年三月）

12 九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門に所蔵されている。

13 福岡県遠賀郡水巻町杁九十一

14 いわゆる炭鉱長屋、炭住。「鉱員社宅は、一棟6～8軒の棟つづきの長屋で二階建てでした。二階建ての炭住はめずらしく、ハーモニカ長屋とも呼ばれていました。」（『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』水巻町歴史資料館、二〇〇五年九月）

15 『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』より。

16 誌面上部欄外には「日炭高松新聞」と記載されている。ここでは、『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』の記述を参照して機関紙「日炭高松」と表記する。

17 『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』より。この機関紙「日炭高松」は、「プランゲ文庫新聞コレクション石炭産業関連資料集成」において、二〇〇号（一九四六年六月十日）から二五七号（一九四九年九月十五日）まで（欠号は、二一一号、二一三号、二一六号、二二三号、二三八号）を、現物は、九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門に十二号（一九三七年六月十五日）から五十九号（一九三七年八月一日）、二〇六号（一九四六年十月一日）から六四〇号（一九六九年九月十九日）（但し欠号あり）が所蔵されている。

18 坂口博「『サークル村』創刊前夜」（『復刻版サークル村　別冊』不二出版、二〇〇六年六月）

19 これら、高松文化連盟の詳細については、例えば北河賢三『戦後の出発　文化運動・青年団・戦争未亡人』（前掲）、有馬学「戦時期日本の文化・運動・地方」（松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、二〇〇七年五月）で述べられているように、戦中期の大政翼賛運動との繋がりのなかで捉え直す必要がある。この点については、稿を改めて論じたい。

20 九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門に二十九号（一九五一年三月一日）から二四〇号（一九六七年十二月一日）まで欠号が多いが所蔵されている。

21 九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門所蔵の日炭高松における機関紙綴りには、一九五八年から一九五九年の機関紙がファイルされている。

22 発行責任者大石溢美、編集責任者馬場春一

23 発行責任者森安照喜、編集責任者杉原・茂谷

24 発行人星子勲、編集責任者有吉富造、発行所日炭高松労働組合、印刷所

25

双羽印刷有限会社、製本所伊美製本所

26 創刊号のみ、編輯・発行・印刷温雅荘文化部、一九四八年七月十日発行

27 第一号（一九五三年五月十五日）～第五号（一九五四年三月十日）、発行所筑豊炭坑労働者文芸工作集団（福岡県遠賀郡水巻町吉田高松労組一支部内）、発行責任者黒井修、編集責任者上野英信

28 第一号（一九五六年一月一日）～第五号（一九五六年五月十五日）、発行所日炭高松文芸学習会（福岡県遠賀郡水巻町片山区弥生町第一高松炭砿内国上方）

29 創刊号（一九五六年十一月一日）～第十一号（一九五八年三月八日）、日炭高松文学・美術サークル協議会、発行編集責任者上田博、事務局福岡県遠賀郡水巻町頃末日炭高松労働組合教育宣伝部。第八号は日炭高松労働組合文学美術サークル協議会。第九号から「文芸誌たかまつ」という名称に。第九号は編集発行責任者栗屋光教、第十号は発行所日炭高松美術文学サークル協議会、編集者サークル誌編集委員会、第十一号は発行所日炭高松労組美術文学サークル協議会、編集者栗屋光教・平岡義人。

30 発行所高松文学サークル（若松市浅川区三頭）、印刷所小田謄印社（八幡市黒崎神原町二）、一九四七年十一月

31 ただこの点については並行していた可能性も捨てきれない。

32 坂口博「『サークル村』創刊前夜」にも指摘がある。

33 紹介文として「東見初炭砿でガス燃焼があり八人の仲間が死んだ。この死をいたむ作品を中心に今迄発表してき（た）作品で構成詩まきやぐらをつくった。」とある。

34 「〃 せんぶりせんぢが笑った〃につづく問題作！／ひとくわぼり／黒田藩の暴政にしいたげられた農民の苦しみと反抗を史実で画くえばなし」と記述されている。

35 事務所は戸畑市に所在していた。

36 この座談会を開催するにあたり労働組合教宣部から各文化団体へくばられたビラ「『眞空地帯』の野間宏さんを囲む／座談会、開催のよびかけ」には、以下のように記されている。「私たちは今、皆さんにすばらしいおしらせをしたいと思います。それは、突然有名な「眞空地帯」の作家、野間宏さんが来る二月二十日（日曜日）にこの筑豊（高松）にやってこられるということです。／私たちは今、苦しい生活と平和の希いがおびやかされており、毎日を不安な気持でおくつております。／この中で私たちは何とかして少しでもいゝから、みんながしあわせになりたい。戦争のない住みよい世の中にしたいという希望をもつていろ〳〵な活動をやつております。私たち働くものの文学うんどうもその一つではないかと思います。（略）／そこで今度の野間さんの来られるのを機会に文学を愛好する人も、又そうでない人でも私たちの職場のこと、サークルのこと、社宅のことなどいろ〳〵な話をもちよつてこの集りを盛大なものにしたいと思います。／この座談会の準備のため左記のとおり実行委員会を開きたいと思いますので、このよびかけをうけとられた団体はその近くの団体へ、又、このよびかけをうけとられた方はあなたの最も親しいお友達に、一人でも多くの人におしらせくださるようお願いいたします。／／野間宏氏歓迎座談会実行委員会／一、とき　二月十五日午后六時／一、ところ　日炭高松労組本部会議室／一九五五年二月十一日／日炭高松労働組合／教宣部長高野智／日炭高松青年婦人会議／議長庄田明」

37 「一九五四年」となっているが、このビラは、文面から野間の座談会の後のものであるので「一九五五年」の誤りだと思われる。

38　一九五三年春、杵島炭鉱の中島博明を中心に「窓」が発行されている。当時日炭高松と杵島炭鉱労組は交流があったようなので、この「窓」のことかと思われる。同人は二十人余りで、昭和三十年初めまでに十二号を出しているようである（佐賀の文学編集委員会編『佐賀の文学』新郷土刊行協会、一九八七年一月）。中島博明は後に「サークル村」にも参加している。

39　表表紙もしくは裏表紙の裏頁などに掲載されていた。

40　福岡県遠賀郡水巻町頃末

41　福岡県八幡市折尾町長崎

42　注19に同じ。

43　上田博氏への聞き取り（二〇〇八年八月二十三日）による。

44　田村紀雄＋志村章子編著、新宿書房、一九八五年三月二十日

45　第一号（一九五三年五月十五日）の森本ひろし「青年よ祖国のために！」、第三号（一九五三年八月一日）の「ヤマの童心は訴える！―小・中学生の作文集―」、第四号（一九五三年十二月十五日）のもりもとひろし「ゴーホームヤンキ！」、山崎喜與志「硬山」

46　金子徳好は、上野英信と実際に会っている。「九州にオルグに派遣された時、福岡で『海峡』という文芸同人誌を発行していた青年と交流したことがある。ガリ版印刷で、表紙は多色刷だった。きたない事務所で名刺を交換したが、上野英信という青年だった。十年後、彼のルポが世にでた時は嬉しかった」（『ガリ版文化史―手づくりメディアの物語』）。

47　日本機関紙協会の綱領には、「一、日本機関紙協会は、戦争と虚偽の宣伝とたたかい、真実を守りぬくために闘う。／一、日本機関紙協会は、平和と独立、生活と権利を守る民主的言論の育成強化のために闘う／一、日本機関紙協会は、国民的宣伝戦線統一のために闘う。」とある。「この綱領にそって、結成当時は、まず労組や民主団体機関紙の用紙かくとくの運動をおこなった。当時は、商業新聞だけに公定の安い紙が配給され、労組や民主団体機関紙は、高いヤミの紙を使わざるをえなかった。そして、この運動は成功した」（金子徳好、森一作共著『宣伝活動入門』日本機関紙協会、一九六八年八月）。

48　日炭高松においては、『日炭高松組合十年史』（日炭高松労働組合、一九五九年五月一日）の編集を担当。

49　森一作氏への聞き取り（二〇〇八年十一月十三日、二十日）による。森は西日本新聞社勤務時代に同職場にいた谷川雁を知る。一九四七年、編集部にいた五人が「編集権侵害」という名目で解雇。当時組合の書記長は谷川、森は教宣部長だった。後に谷川から「サークル村」を創るという話を聞き参加することになる。

※　本稿は、第一回筑豊・南部合同研究会（二〇〇八年六月二十一日、於青山学院大学）での報告（「水巻町の文化運動について」）、第二回同会（二〇〇八年十一月二十二日、於九州大学六本松キャンパス）での報告（「『月刊たかまつ』について」）の一部を基にまとめた。会場にてご教授下さいました方々に御礼申し上げます。また、今回取り上げた資料につきましては、坂口博氏、法政大学大原社会問題研究所、九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門に大変お世話になりました。閲覧の便宜を図って下さったことに、記して御礼申し上げます。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年）